

菅又厚美作 「初めてのデート」

(効果音) (都会の雑踏)

森田美幸 ひろみ、どうして彼氏と来なかったのよお。

松下ひろみ じゃあ何？ わたしだけ男連れで映画を楽しめってわけ？

美幸 だって、ひろみ、「この映画は女同士で見るもんじゃない」って言ってたじゃない。

ひろみ 美幸はどうなのよお！

美幸 わたし？ あらあ、わたしは彼氏なんて決めないもの。広く、浅く。

ひろみ “浅く”か…。ねえ陽子、さっきから黙ってるけど、どうかしたの？

山中陽子 あの、やっぱり、映画っていうのは、女の子同士じゃダメなの？

ひろみ え?!

美幸 やっだー！ 陽子って変わり者ねえ。そんなこと考えてたのお？

陽子 …。

ひろみ 「この映画」って言ったでしょ？ たまたま女3人そろって見るような映画じゃなかった、ってだけよ。

美幸 そうそう。

陽子 …ふふふふふふ。(笑う)

ひろみ・美幸 何よ、いきなり。

陽子 じゃあいいのね？

美幸 何が？

陽子 映画見ても。

ひろみ う、うん、そうよ。(小声で)美幸、相変わらず疲れるわね、陽子って。

美幸 (小声で)確かに。どっかのネジが緩んでんじゃない？

陽子 ん？

ひろみ・美幸 ううん。別に。

ナレーション …と、3人寄ったカシマシ娘は、森田美幸、松下ひろみ、山中陽子(3人自身の声で)、青春中学2年生。今日は期末試験が終わって、連れ立って映画を見に来たのです。と、そこへ――。

原哲男 (オフ)おーい！ 晃司、待ったかあ？

高田晃司 ざっと100年ぐらい。

哲男 お前なあ。

晃司 ウソだよ。10分ぐらい。

哲男 ワリイワリイ。

晃司 じゃ、そろそろ見ましょつか。

哲男 おお。…げー！ すごい人だなあ。本当かよ！ こんなんで席取れるかな。
晃司 ダメなら、次の時間か、別の映画にしようぜ。
哲男 ああ。
ナレーション やってきたのは、隣の希望中学の2年生、高田晃司、原哲男(2人の声で)。
陽子 いっぱいいる。
ひろみ みんな暇ねえ。
美幸 言ってる本人は？
ひろみ そうであった。
陽子 美幸ちゃん。こんなにたくさんのは、立って見るの？ (すっとんきょうな声
で)イヤーよお、そんなのお！
美幸 ヘンな声出さないで！ まだなんにも言ってないじゃない。
ひろみ 分かんないから次の時間帯も見てみようか。
美幸 うん。
ひろみ ゲゲ！ 押さないでよ！
美幸 キャー、足踏んだあ！ 何よお、いい加減にしてください。
陽子 ごめん。
美幸 なんで陽子が謝るのよお。踏んでるのは後ろのやつよ。
陽子 …わたし、“後ろのやつ”。足の上に乗ってるのもわたしよ。
美幸 何度言えば分かるの、陽子は？ トロいんだねえ。陽子が踏んでるわけな…
陽子！ 陽子が踏んでるんじゃない！ 早くどかしてよ！ 痛いわねえ。
陽子 だから言ったのに。
美幸 言うてからじゃ遅いの。
ひろみ ねえ、根性で入ろうよ。でないと帰りがダメだよ。
美幸 あ、そうね。ひろみ、バスだし。
陽子 キャー！
ひろみ どうしたの?!
美幸 また何か遊んでるんでしょ。
陽子 へ？ なあに？ わたし？
晃司 そう、君。
美幸 あなた、なんですか。陽子のこと引っ張って。
晃司 僕、この子見てて気に入ったから。
ひろみ 気に入ったら引っ張るんですか?!
晃司 いや、あの…すみません。それは悪かったです。つい取り乱してしまって。でも
この子が僕のこと…。
美幸 気に入るとでも思うんですか？
ひろみ 残念ながら、陽子は男嫌いで…。

陽子 気に入った。

ひろみ・美幸 陽子！

哲男 晃司の勝ちい！

ひろみ あなたは何よ？

哲男 晃司の友達。

美幸 どいつもこいつも、ったく。

ひろみ 前行こう。陽子！

陽子 あの…。

晃司 あ、あの、よかったら、今度僕と会って欲しくない？

陽子 うん！

ひろみ 陽子！ なんにも知らないでホイホイ乗らないの！

美幸 ナンパされたのよ、わたしたち。分かってるの？ 軽々しくしちゃダメよ。

哲男 君らに声かけた覚えはないけど。

美幸 うるさい！

ひろみ とにかく、ヘラヘラと危ないからダメよ。ゼツタイダメ！

哲男 あ、その点なら平気。こいつ、クリスチャンだから。

美幸 えー、面白いじゃない。クリスチャンって、ナンパってもいいの？

晃司 ダメかなあ、やっぱし。

陽子 (大声で)いいと思う！

ひろみ 急に大声にしないでってば、陽子はあ。

晃司 陽子ちゃん、一緒に…。

ひろみ 「…教会に行ってみないか？」とでも言うの？ 上等じゃないのさ。ええ、ええ 行ってやるわよ。その代わりに、わたしと美幸も行くわよ。ガード付きよ。これでもか！

美幸 (小声)よしてよ。本気？ イヤよお。毎週行くんでしょ？

ひろみ (小声)陽子に合わせようよ。

美幸 (小声)陽子のことだから、ゼツタイ、「毎週行く」って言うに決まってる。

ひろみ (小声)仕方ないわよ。

晃司 じゃあ、みんなで行こうよ。ね？

哲男 おれもかあ？

晃司 ああ。イヤか？

哲男(モノローグ) 「イヤかあ？」って言われちゃ、イヤとも言えねえしなあ。

晃司 哲男。

哲男 あ。ああ、いいぜ。

陽子 にぎやかになるね。よかったね。

晃司 うん。

ナレーション　　こうして、晃司に誘われた4人は、ひよんなことから、生まれて初めて教会に行ってみることになりました。次の日曜日――。

(音楽)　　(賛美歌)

ナレーション　　4人は、晃司の案内で、朝の礼拝に出、勧められるままに、礼拝のあとの青年会の集いにも参加したのです。その帰り道――。

哲男　　なんかさあ、話はあんましょく分かんなかったけど、みんな知らない人たちののに、すごく親しくしてくるんだな、教会って。

晃司　　なれなれしいとかっていうんじゃないで、すごく皆いい人たちだったろう。

ひろみ　　ほんと。でも、よく家にくるセールスみたいな人たちとは違ってた感じね。ほら、セールスとかって、いきなり家のドア開けたと思ったら、「あなたは神を信じますか？」とか言って聖書売りつけて、あとでいろいろしつこいじゃない？

美幸　　ああ、それぞれ。よくあるよね。それが偽の聖書だったりするやつでしょう？

晃司　　いや、あんまり押し付けみたいなのはしない。それより、話は分かんなくても、“キリスト教って、イエス・キリストを本気で信じてるんだな”ってこと、分かってもらえたかなあ。

美幸　　そうね。なんとなく。

ひろみ　　なんかこう、気持ち落ち着いたって感じ。

哲男　　うん。あのさ、ほら、なんだっけ、そのキリストの言葉でさ、うーんと「裁いてはいけません。裁かれないためです」ってところ…。あ、そうだ、「自分の目の中の梁には気がつかないのに、なぜ『あなたの目のチリを取らせてください』などと言うのですか？」っていうの、あったじゃん。

ひろみ　　あった、あった。

美幸　　あれ、いい言葉ね。

哲男　　うん。“いい言葉”っていうか、なんと言っているのか…。こう、グサッと来る言葉だったな。

ひろみ　　わたしも。背中が冷たくなったもん。なんか、さっきまでの自分そのものを、しっかり見られてて、それをあえて言われてしまったような…。そんな気分。

美幸　　一瞬、本当に怖かったよ、わたしも。“神様っていうのは、こうやって、人間にいろいろなことを気づかせてるんだな”ってね。

ひろみ　　うん。反省しちゃったよ、わたし。

哲男　　おれもおれも。人のこと、あれこれ言えなくなったよ。晃司って、一見チャランポランふうでも意外とマジなことあると思ったら、こういういいことばかり習ってるからなんだな。

晃司　　いや、それだけじゃダメだよ。自分からも答えを出すために、聖書をたくさん読んだりもしなくちゃ。いつもそういう恵みを感謝してなくちゃ。祈るんだよ。

ひろみ ふーん。なんか、晃司君ってスゴいんだ。

美幸 さすがねえ。

晃司 さすがとかじゃないよ。

哲男 クリスマスは謙そんもするんだ。

晃司 哲男、あのなあ。

哲男 まあまあ。とにかくまた来週も一緒に行こうぜ。

ひろみ わたしもいい、晃司君？

美幸 わたしもー！

晃司 うん、喜んで。どうぞどうぞ。ねえ、陽子ちゃんは？

陽子 なんかうれしくって。

晃司 泣いてるの？

陽子 やあだ。泣いてなんかいないよ。感動しただけ。

晃司 え？

陽子 初めは、なんか、美幸もひろみもわたしのガードってことで教会に来たけど、帰りは、もう夢中になって話してるじゃない？

晃司 うん。

陽子 うれしいんだ、なぜか。ね、特に、わたして目立つ女子じゃないじゃない？女の子同士って言っても、いつもひろみたちといるだけで、まして、男の人となんて話したこともなかったの。それが、映画館で知り合って、今日初めてデートしたじゃない？ とっても貴重な出会いだったみたい。晃司君のお陰で、すてきな時間が過ごせたもの。デートって、二人っきりのほうがムードあるっていうけど、わたし、こうして友達と一緒に教会でお話聞いたり、賛美歌 歌ったりしたデートのほうが、一生いい思い出として心に残りそうよ。ありがとう、晃司君。

晃司 な、なんか、おれのほうこそ…。あ、ありがとう。

美幸 やあだあ。何お見合いみたいにやってるのよあ。

哲男 (笑い)確かに。

ひろみ 陽子って、案外マトモで心の中 素直なんだ。今まで、なんかイマイチ何考えてるのか分からなくて。だからイライラしちゃったり、バカにしたりしてた。ごめん。

美幸 ほんとはわたしもそうなんだ。ごめん、陽子。

陽子 いいのよ。本当にそうだったんだもん。なんだか今日、本性が引き出されたって感じ。

晃司 じゃ、これからも毎週さ…。

陽子 うん、みんなで行こうね。

美幸 お邪魔でなければ。

晃司 よせよ。

一同 (笑い)

ナレーション

陽子は、その時、今まで味わったことのない晴れやかな気持ちを味わっていました。そして、これから待っているであろう晃司たちとの青春の時を、このすがすがしい一瞬、一瞬で埋めていきたいと、心から思ったのでした——。

<完>